

## エコノミストは信用できるか

～経済学者をずらりと縦に並べて横たえると

合意に達しないはずだ(バーナード・ショー)～

第一生命経済研究所  
常務取締役 野村 哲朗



「エコノミストは信用できるか」(東谷暁著、文春新書)という本が売れている。著者によると、90年のバブル崩壊後、経済が低迷するほど拡大を続け、我が世の春を謳歌した市場がある。エコノミストあるいは経済評論家と呼ばれる人達の市場だ。本書では、「エコノミスト」とは「経済研究所に属して論評する人」以外にも、大学に籍を置く経済学者、経済評論家として盛んに論評している人達を指している。著者は実名を挙げて、この10年余のエコノミストたちの発言や著作を「主張の一貫性」という指標に照らし、手厳しく評価している。主張の一貫性が希薄なエコノミストは、たとえ予測や分析が的中していても、単なる偶然である可能性が強いという。

世間一般から見ると、『文芸評論家の小谷野敦氏の「経済学というのは重要なようだが、役に立っているのかが極めて怪しい学問に成り果ててしまった。何しろ未来予測が全然できないのである。さらに景気が悪いのに有効な処方箋を書けない。その割に、経済学者やエコノミストといった人種は意見をこころ変えて反省の色もない」(若田部昌澄「経済学者たちの闘い」東洋経済新報社)』というのが代表的な意見ともいえ、そうした観点からはなかなか痛快な内容だ。

なぜそうなのだろうか。エコノミストの主張に疑問を感じる理由を3つ挙げてみたい。第一に、経済成長率などの数字の予想に関するものである。最も典型的なGDPの予想数字などを見ると、度々予想数字が変わり、とても信用できないという印象を与えるかもしれない。三ヶ月先の短期的予想でも大きくぶれることが往々にしてある。これはエコノミストの責任と言うより、GDPの数字自体が推計を重ねたある意味で架空の数字だからだ。名目に対して実質、季節調整、基準年度の変更などテクニカルな要因に非常に左右され、政府発表の実績数字も時として大きく変わることに原因がある。先日発表された来年度の経済成長率の予測にしても、実質で1.5～3.0%、名目で0.8～1.1%とかなりの幅がある。この低成長下では、1.0%程度でも大変な違いという事になるのだろう。しかし、景気はその流れや方向性が重要であり、数字自体を云々するのは必ずしも妥当とはいえない。

第二に、経済学者間の意見の対立である。例えば、デフレからの脱却方法についても、古典派とケインズ派では激しい意見の対立がある。N・グレゴリー・マンキュー(「マンキュー経済学」(東洋経済新報社))によると、経済学者が政策立案者に提示するアドバイスが対立するのには以下の三つの基本的な理由があるという。

実証的理論の中で、どれが妥当性を持つかについて意見が一致しない可能性、価値観が異なるために、政策が達成すべき目標について、規範的な考え方が異なっている可能性、経済学者は本当は同意しているのに、エセ経済学者たちがかく乱している可能性。

第三に、エセ経済学者(エコノミスト)の存在である。『ベストセラーリストを飾る、非常に影響力のある経済学的教祖(グル)がいる。彼らの著作は真剣なエコノミストならまず賛成しかねる考えを説くものばかりだ。それらの考えは専門家の意見と一致しないばかりか、明らかに間違っている。しかし、無邪気な読者には立派に聞こえるのである(ポール・クルーグマン「グローバル経済を動かす愚かな人々」早川書房)』、『以前、経済学の入門書で話題になった本がある。一つは予備校の先生が書いたもの。もう一つは政権に近い経済学者と称する人が書いたもの。両方を比較してみたとき、前者のほうがはるかに良い。予備校の先生は執筆の理由として、日本の経済危機を救うためだと書いた。経済学者と称する人の本には、そんな事は書かれていない。何のための学問なのか、わかっていないのだ。だから、予備校の先生のほうが大臣や経済学者と称する人々よりも遥かに優れている(小室直樹「経済学をめぐる巨匠たち」ダイヤモンド社)』。経済関係のシンクタンクに籍を置く者として、この言葉を噛み締めたい。